説教要旨「身代わりとなる神」

マルコによる福音書　１章４０～４５節

日本にはハンセン病の人々を隔離収容し、人権を蹂躙した歴史があります。ハンセン病はかつては、「天刑病」とも呼ばれ、この病の人は、天から刑罰を受けているのだととらえられていました。不治の病の人に対して、神から罰を受けているという言い掛かりをつけて差別をしていたのです。しかもこの病気の原因が分かり、特効薬が開発されて治る病となってからも長く国の隔離政策が続き、不当な苦しみを与えてきたことをわたしたちは忘れてはなりません。

イエス様の生きられた時代の「重い皮膚病を患っている人」もやはり、非常に厳しい境遇にありました。患者は町の外で暮らすことを強いられ、何か必要があって町に入るさいは、「わたしは汚れた者です」。と、町の人が自分に近づかないように叫んで歩かなければなりませんでした。自ら他者との触れあいを拒絶し、孤独に生きなければならない苦しみはどれほどのものであったでしょうか。

イエス様はこの患者に手を差し伸べて触れられました。「汚れた者」に手を触れるとその汚れが移ると考えられていましたから、これは驚くべきことです。そしてイエス様は彼を癒し、祭司のもとに行って体を見せるよう命じました。祭司によって清められたことが認定されて初めて、彼は町の中で生活できるようになるからです。そして、イエス様は祭司に体を見せるよう言う一方、厳しく注意して「だれにも、何も話さないように気をつけなさい」。と命じられました。しかし彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広ました。その結果、「イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた」。のです。

彼は町の中で人々と共に暮らすことができるようになり、そのかわりにイエス様は、公然と町に入れなくなった。つまり、この清めの奇跡によって、重い皮膚病を患っている人とイエス様との立場が逆転したのです。彼を清め、神の民の一人として回復して下さったイエス様が、彼の汚れを、その苦しみ、悲しみを、すべて引き受けて下さったのです。

（２０２２・１・３０　説教者：稲垣真実）